

第17期第6回青森県生涯学習審議会 会議概要

日時	令和8年7月16日（木）9：30～12：00
場所	青森県総合社会教育センター 第2教材開発室
出席者	▼委員 小野 淳美 岡 詩子 岩本 ヤヨエ 小笠原 秀樹 工藤 貴子 越村 康英 松浦 淳 高砂 充希子 山崎 結子 ▼事務局 清川 喜之（生涯学習課長） 三浦 博明（生涯学習課学校地域連携推進監・課長代理） 三上 崇裕（生涯学習課企画振興グループマネージャー） 他2名
内容	1 開会 2 案件 （1）諮問に係る審議事項1の報告案について （2）その他 3 閉会
配付資料	1 第17期第6回青森県生涯学習審議会次第 2 第17期青森県生涯学習審議会委員名簿 3 第17期第6回青森県生涯学習審議会座席図 4 【資料1】諮問に係る審議事項1の報告案について 5 【資料2】第17期青森県生涯学習審議会・第37期青森県社会教育委員の会議スケジュール 6 【参考】諮問書

1 開 会

(内容省略)

2 案 件

会長 本日の審議会は「中間まとめ」を提出するに当たり、非常に重要な会議になると捉えています。今期の審議会は、本日を含めて残り2回となっています。

おそらく最終回は、提出する文書の最終的な確認や調整に時間を使うことになるかと思います。そのため、中身の大きな修正や検討については、実質的に今回の会議である程度決着をつけなければならないと考えています。

皆様には事前に資料に目をとおしていただいているかと思いますが、「〇ページのこの記述をこのように修正したほうが良いのではないか。」といった、具体的な形でご意見をいただけますと幸いです。ご協力よろしくお願いいたします。

それでは、次第に沿って案件に入りたいと思います。まず1番目の案件「諮問事項1の報告案について」です。事務局よりご説明をお願いいたします。

(事務局から「資料1」について説明)

会長 本日ですが、第1章、第2章、そして一番のメインとなります第3章を(1)(2)(3)と区分しながら、内容の検討を進めていきます。

まずは第1章「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくりの推進における現状」についてです。

委員 今回の資料は非常にうまく文面がまとめられており、大変感謝しております。私自身も論文を数本執筆した経験がありますが、このような報告書を作成するのは本当に大変な作業だと感じています。

その上で1点提案なのですが、1ページ7行目にある「ウェルビーイング」という言葉について、どこかに注釈や説明を付け加えたほうが良いのではないかと感じています。私自身は「体や心が満たされている状態」と理解していますが、これは比較的最近の新しい用語です。どのような人が読んでもきちんと理解できるかと考えた際、どこかに説明が必要ではないかと思いました。脚注でも構いませんので、補足説明を少し入れていただけるとありがたいです。

会長 「ウェルビーイング」について、簡単な解説や注釈を加えるべきだというご意見、もっともだと思います。今回の資料をご覧くださいとわかるとおり、所々にコラムのような形で補足説明を入れていますので、その一つとしてウェルビーイングの説明も付け加えたいと思います。

政府の「第4期教育振興基本計画」などにもこのウェルビーイングという言葉が登

場しますので、その点にも言及しながらまとめていくと、より良いものになるのではないかと考えています。

委員 1 ページ 1 行目に「我が国は現在人口減少や少子高齢化の本格化」という記述がありますが、「高齢化の本格化」という表現が気になりました。高齢化自体はとっくに本格化しているからです。

高齢化率が 7 %以上 14%未満を「高齢化社会」、14%以上 21%未満を「高齢社会」と呼び、これらはすでに超えています。現在は 21%を超えて「超高齢社会」と言われていますので、「高齢化の本格化」という時期はとっくに過ぎているのではないかと感じました。そのため、表現としては「少子高齢化の深刻化」や「少子高齢化が一層進展する」といった言葉の方が適切ではないでしょうか。

次に、「本県の現状と課題」についてです。内容自体はこのままでも良いとは思ったのですが、2 ページの 8 行目にある「2023 年には 76 年ぶりに 120 万人を下回っている」という記述があります。

ここで「2023 年に下回ったこと」を強調したい意図があるのか、少し疑問に思いました。そもそも、青森県の人口が 120 万人だった時代を知っている世代がどれくらいいるのでしょうか。私自身のこども時代、ちょうど 49 年前の国体の頃ですが、当時は「人口 125 万人」などと刷り込まれた記憶があります。そうした記憶があるのは、私のようにすでに 60 歳を超えている年代ではないかと思えます。

そのため、この「120 万人を下回った」という表現に何か特定のこだわりや出典があるのかどうか気になりました。もし特にこだわりがないのであれば、昨年実施された国勢調査でも青森県の人口が 114 万人と発表されているとおり、「人口がどんどん減って、今や 114 万人しかいない」という現状を伝える表現にしてはどうかと感じました。

会長 1 つ目は、1 ページ「1 国の動向」の書き出し部分です。「人口減少や少子高齢化の本格化」という表現について、本格化という言葉ではなく、「急速な進展による」や「深刻化」といった表現の方が良いのではないかというご指摘でした。確かに、高齢化社会、高齢社会、超高齢社会の定義から見ると、高齢化の捉え方が変わってきます。その点も意識しながら、誤解のないような書き方に改めたいと思います。

2 つ目は、2 ページ「2 本県の現状・課題」についてです。最新の国勢調査の結果で示された具体的な数値を出す方が、インパクトがあるのではないかということでしたが、いかがでしょうか。

委員 どちらが良いのか私には判断できかねる部分があります。文脈として「120 万人を割った」という点を強調したい意図があるのかということです。現在の記述も間違っているわけではないので、このままでも問題はありますが、どうなのだろうかという意見です。

事務局 この部分については、諮問を受けた際の理由書からそのまま引用しているため、

当時の記述のままになっています。しかし、審議を開始してからすでに2年が経過していますので、最新の数値を入れた方が良いと考えます。そのため、ここは最新のものに修正したいと思います。

会長 「100万人を下回る」といった表現であれば、きりが良くインパクトがあるとも思いますが、最新の数値に書き改めたいと思います。

委員 3ページ1行目からの記述についてです。「公民館等の社会教育施設についても、中高生では利用率が低下していることが課題である」という内容が出てきますが、2ページ目の前段部分では公民館に関する話が見受けられず、少し唐突に出てきた印象を受けました。

テーマとしては合っていると思いますが、この記述だけでは「何と比べて利用率が低下しているのか」が読み取れません。例えば、小学生の頃はこれくらい利用されていたけれど中高生になって低下したのか、あるいは時代とともに全体的に低下しているのか、もし数値的なデータがあるのなら、何と比較して低下しているのかを具体的に明記した方が、より分かりやすくなると感じています。

会長 この部分については、令和7年度に生涯学習課で実施した「生涯学習・社会教育総合調査研究事業」である「こどもの学校以外における地域活動に関する実態調査」の結果を基に記載されている箇所になります。そのため、調査結果の具体的な数字を少し紹介しながら、きちんと根拠を持って述べていることが伝わるように改めたいと考えています。

先ほど冒頭で委員からも、第1章は丁寧にまとめられているというお言葉をいただきましたが、全体として現状が概ね適切に記載されていると感じています。ひとまず、ご指摘いただいた箇所に修正を加える形にして、今日の時点では固めておきたいと思っています。

では、続いて第2章に進みます。

委員 野辺地町のふるさと学習の箇所について、5点の修正案を説明します。

1点目は、9ページ22行目の表現についてです。資料には「教員向けの『ふるさと研修』を実施し、指導者が地域への理解を深めることで、学校現場における地域学習の継続性と質の向上を図っている。」とあります。しかし、これでは教員と指導者が同一であるかが分かりにくいと感じました。文中に「教員向けの」という言葉もありますので、「指導者である教員」という表現への修正をお願いします。

2点目は、10ページ21から23行目の数値についてです。「祭りに参加・見学するこどもの割合が当初の半数以下から8割まで大幅に向上している。」という記述について、これほど高い割合で増えているという数字に少し違和感を覚えました。対応した歴史民俗資料館の担当者にも確認しましたが、どのような経緯で判明した数値なのか、データとしての確証が持てませんでした。もしかすると数字に誤りがある可能性もありますので、具体的な割合は出さずに、「当初より増えている」という表現に留めてい

ただくよう変更をお願いします。

3点目は、11 ページ8 から9 行目の経過年数についてです。資料には「ふるさと学習の開始から約 15 年が経過し、当時学んだ児童が社会人や保護者として地域に戻り、新たな担い手となる時期を迎えている。」とあります。しかし、野辺地町でふるさと学習がプレスタートしたのは平成 30 年からで、本格的に始まったのは令和元年からですので、まだ8 年しか経過していません。当時の小学生は現在まだ大学生の年代であり、社会人や保護者にはなっていません。おそらく対応した先生が発言された「今後、保護者や担い手となって戻ってきてくれる」という将来への期待の内容が、現在の状況として混ざって記載されてしまったのだと思います。ここは、「ふるさと学習の開始から約8 年が経過し、当時学んだ児童が今後地域に戻り、新たな担い手となることが期待される。」という、今後の展望としての書き方に修正をお願いします。

4点目は、14 ページ6 行目の記述についてです。「協力校の移転により、地域の祭りや行事が縮小してしまう懸念がある。」という一文がありますが、この部分は削除をお願いします。現在、町内には小学校が2 校あり、令和 10 年に統合される予定です。おそらくその件に関する発言だったのだと思いますが、この2 校は街中にあり、直線距離でも 500 メートルほどしか離れていません。そのため、統合や移転によって地域の祭りが縮小するとは考えにくいです。現に今年の祭りをみても、昨年まで休止していた町内が山車を新しくして復活させるなど、良い結果が出ています。これがすべての結果ではありませんが、行事が大きく縮小している事実はなく、むしろ元の姿に戻つつあります。他の町内の山車に出ていたこどもたちが、自分の町内に戻ってきて参加できるようになっている現状もありますので、この懸念の記述は不要だと考えています。

5点目は、14 ページ8 から9 行目の課題についてです。「広報や発信方法に課題があり、小中学生の意見や感覚を活かす方法を見つける必要がある。」という箇所について、少しニュアンスが違うのではないかと感じました。現状の課題の本質は、広報や発信方法にあるのではなく、こどもたちが学んだことを活用する場を提供していくことにあります。そのため、前段の広報に関する記述は削除して、「小中学生が学んだことを活用する場を作るのが課題である。」という表現に直していただければ助かります。

会長 今の委員のご指摘について、何か意見や補足があれば伺いたいと思います。

委員 ふるさと学習の实地調査に行きましたが、先ほどご指摘された内容の「協力校の移転により、行事が縮小されてしまう懸念がある。」と書いたのは、実は高校のことを想定した記述でした。ただ、修正自体は委員が提案されるとおりで全面的に良いと考えています。

委員 あの時確かに高校のことを想定してお話ししていました。そのため、基本的には提案に沿って見直しが進めば良いと考えています。

委員 単に学校とだけ書かれていると小学校や中学校のことだと思って見てしまうため、

これが高校だと分かるような書き方に変更するのはいかがでしょうか。そのあたりはどのように考えたら良いでしょうか。

委員 書きぶりについてはお任せしますが、もし高校に関する記述だとした場合、どのような認識を持たれているか伺いたいです。当時は、高校生たちが地域外に出ざるを得ない環境になりそうという話があり、もしそうなった場合は結構危ないという懸念があったため、このような書き方になりました。その内容の受け止め方について伺えればと思います。

委員 協力校というのは野辺地西高校のことで、来年度に移転することが決まっています。野辺地西高校はもともと工業高校だったという経緯があり、自動車や電気などのノウハウを持っていたため、お祭りの山車を出していました。しかし、移転によってそれができなくなってしまいます。すぐ近くに県立の野辺地高校がありますが、そこにすべてを引き継ぐのは、ベースがありませんし、先生方にも指導のノウハウがないため難しいという背景があります。そこで現在、野辺地高校には別の形での参加をお願いしています。今年はちょっと難しいのですが、今年から少しずつ踊りで参加してもらえないかと準備を進め、講習などを行っている現状です。

この書き方については、「協力高校」など書いても良いかもしれません。

会長 基本的にはご指摘のとおり修正を加える方向で進めます。ただ、高校に関する部分については、改めて高校の事情も意識していただき、それをうまく反映させるための具体的な表現案を後ほど出していただけると助かると思っています。

また、ご指摘を伺いながら思ったのですが、このような内容の確認は、私たちが実地調査を行ったすべての地域に該当することではないでしょうか。私たちは委員としての視点で調査してまとめているため、どうしても独自のフィルターがかかってしまいます。そのため、実際に各地域で活動し実践している方々から見れば、捉え方が違っていたり違和感を覚えたりすることが大いにあると思います。本来なら1件ずつ確認できれば良いのですが、なかなかそうもいきません。そこで、どこかに「実地調査に携わった委員がまとめたものであるため、場合によっては事実と若干のズレが生じていることもある。」という旨の断り書きを入れてはどうかと考えました。やはり、きちんと正確性を確かめて担保した上で出すべきでしょうか。

委員 悩ましい問題ですが、これは答申に向けて諮問に対する委員側からの回答としてまとめていくものです。実地調査を経て、委員の中でこのような内容がまとまりましたという形で提出する意味合いを考えれば、会長が提案された形に沿って進めて良いと考えています。

委員 11 ページの8行目にある「ふるさと学習の開始から約15年が経過し」という記述について、正確には8年だというご指摘をいただきましたが、実地調査で話を聞く中で、現在の「ふるさと学習」としての取組は8年かもしれないものの、それよりずっと

と以前から、野辺地町では地域について学ぶ活動が行われていたと聞いていました。当時はそのような名称ではなかったかもしれませんが、もっと前から取り組んでいたという認識を持っていたため、このように書いて整理していました。

そのため、会長の提案したとおり、事実と異なるという意味ではありませんが、「この内容は、私たちが実地調査を行った上での主観に基づくものである」という旨を、どこかに書き加えた方が良いと考えます。

会長 他の委員の皆様も、このような方向性でご賛同いただけますでしょうか。事務局としては、この記載方法についていかがですか。

事務局 実地調査の報告書は膨大なもので、そこから内容を凝縮しているため、まとめる段階で少し無理がかかってしまった部分もあります。ご指摘のあった箇所については、例えば「現在のふるさと学習が始まる前に、歴史民俗資料館の職員が、北前船をとおした歴史をこどもたちに知ってもらいたいと考えて相談し、校外学習を始めたのが平成 30 年である。」といった経緯を付け加えることで、より正確に伝わる部分もあります。そうした箇所については、こちらでもう一度元の資料と現在の原稿を見返しながら、必要な内容を加えていきたいと考えています。

また、協力校の移転についても、例えば「これまで協力してくれていた高校が移転したことにより」という表記に変更した上で、その高校が電気系などのものづくりを強みとしていたこと、それがなくなってしまう引き継げる高校もないという背景が伝わるような書きぶりに改めるなど、事務局で改めて過去の実地調査の結果と照らし合わせ、必要な修正を行いたいと思います。

会長 第 2 章の部分については、皆様からもご賛同いただいたとおり、まずは「私たち委員が実地調査を行ってまとめたものをベースに記載している」という事実を明示します。その上で、事務局において記載内容の正確性を元の調査シートなどと照らし合わせて確認し、修正していただくという形で対応を進めます。

委員 追加してほしい点があります。11 ページの「(6) 事業・取組に係る担い手の育成・確保」の「ウ」の部分についてです。

私が実地調査した、「男女共同参画地域みらいねっと」の避難訓練の取組についてです。通常、教育というと上の世代から若い世代へ何かを教えることが多いですが、この訓練の際、みらいねっとの方々が「男女やお年寄り、若い人も含めて全員で一緒にこの避難所を作っていかなければならない。」と話していました。その際、どうしても上の世代の男性陣があまり動かず女性に任せがちになっている中で、中学生や高校生が男女平等に率先して動いていました。それを見た地域の人々も「自分たちも動かなければ」という雰囲気になっていきました。

また、みらいねっとの方々からも「避難所ではどうしても女性が料理を作り、男性が座っているような光景が見られるけれど、そういった古い慣習も変えていかなければならない。」という話が、こどもたちからお年寄りにまで伝えられていました。単に

こどもたちが新しい学びを得るだけでなく、地域住民も古い慣習を更新している様子がとても素晴らしいと感じました。これをどのように表現すれば良いかは悩ましいですが、13 ページの「取組事例から見えてくる課題」の（５）か（６）辺りに、「避難所を実際に設営するという協働作業の中でお年寄りも若い世代も互いに学び合っていた」という、相互の学びの視点をどこまで具体的に書けるか分かりませんが、ぜひ追加していただけると嬉しいです。

委員 みらいねっとの立場から補足します。私たちが日頃からよく言っているのは、「人数が足りないから女性もがんばれ、中学生も手伝え」というのでは、それはただの「動員」に過ぎないということです。そうではなく、「中学生も地域の大きな力だ」ということを本人たちや周囲に知ってほしくて活動しています。そのため、そのようなニュアンスを文章にうまく入れ込みながらまとめていただければと考えます。

委員 以前にみらいねっとの訓練に参加したことがあります。避難所として指定される場所は中学校の体育館であることが多く、学校のことを一番よく分かっているのは中学生自身です。「マットがどこにあるか。」「どこから運べばいいか。」「どこが立ち入り禁止か。」は、中学生が地域の方々に教えてあげなければなりません。「あなたたちが一番の頼りだから、お年寄りがたくさんいても力仕事ができない分、がんばってほしい。」と伝えると、生徒たちも納得して主体的に動いていました。お年寄りの方々は、大人の女性などに仕切られるのは抵抗があっても、中学生に指示されるのは嫌ではないようで、非常に良い関係性が生まれていると感じました。この内容は、資料の 13 ページにある（５）の「地域住民の巻き込み」という課題に該当するのではないかと考えます。

会長 ３人の委員の皆様による議論を伺い、私もそのとおりだと感じました。先ほど提案してくださったように、13 ページの（５）の箇所、「こどもと大人と一緒に活動する中で大人の側にも様々な学びがある」という点を、防災訓練の実地調査から見えてきたこととして追加し、打ち出していきたいと考えています。

委員 17 ページの「こどもが主役となる機会（事業）の充実」の箇所になります。ここには、こどもが参画する事業づくりや、こどもの「やってみたい」という想い、こどもと共に事業づくりをすること、そして、こどもたちが様々なことにチャレンジすることなどが書かれています。これらを読んだ際、ここで言う「こども」とは何歳から何歳までを指しているのだろうかと考えました。おそらく 18 歳くらいまでを想定しているのだと思いますが、何となく文字面だけを読んでいると、小学生くらいをイメージしてしまいます。

前の会議でも発言させていただきましたが、リスクを予見して「やってみたい」という思いを抑制してしまうような場面において、小学生よりもむしろ中高生にこそチャレンジさせたいと考えています。そして、大人の側がそのリスクを理解し、彼らのチャレンジを後押しすることが大切です。そのため、もし可能であれば、中高生もイ

メージできるような「こどもや青少年」といった表現に変えられないでしょうか。少し考えすぎかもしれませんが、そのように感じました。

会長 一般的に「こども」という言葉を使うと、小学生くらいの小さなこどもたちをイメージしがちであるというのは、おっしゃるとおりだと思います。

ただ、そのすぐ下に「子どもの権利条約」に関するコラムが掲載されていて、日本も批准しているこの条約においては、こどもは18歳未満と年齢の区切りが説明されています。そのため、定義上は中高生も「こども」という概念に含まれていると読めるわけですが、やはりそれだけでは読み流されてしまい、十分に伝わらないのではないかとこのご指摘でしょうか。

委員 そのとおりです。「子どもの権利条約」の3行目に「子ども（18歳未満の人）」という記述があるため、それで良いかとも一度は思ったのですが、やはりどうしても言葉の印象として小学生をイメージしてしまうと感じました。そのため、青少年もイメージできるような表現に、もし可能であれば変更できたら良いと思い発言しました。

委員 資料の16ページの脚注に「こどもや若者」という形で記載されており、今回の内容もそれを踏まえながら展開されています。そのため、第3章の冒頭で「こどもや若者」という形で明記することに内容上の問題がなければ、そのように書き換えることで青少年も含める形になるのではないかと考えます。ただ、そうした場合に「若者とはどこまでの年齢を指すのか」という疑問は若干生じるかもしれませんが、少なくとも対象を幅広く捉えていくという方向性は示せるのではないのでしょうか。

会長 「こども・若者」という言葉は法律のタイトルにも使われているくらいですから、一般的な使い方だと思います。では、この部分については、このように修正します。

委員 表記として「こども・若者」とするのは良いと思います。その上で、17ページ13行目の「チャレンジできるよう、見守りながら信じて任せることも大切にしたい。」という記述についての提案です。この「見守りながら」の前に、例えば「年齢に合わせて」や「学年に応じて」といった、段階があることを示唆する一言を加えることで、内容を多少補完できるのではないかと考えました。

会長 「こども・若者」という表記に変更することと、今、提案してくださったような追記をすることは全く矛盾しません。そのため、両方の意見を反映させながら、先ほど指摘された意図が読み手にきちんと伝わるように修正していきます。

委員 実地調査を担当した箇所についてです。5ページの「青森市東部市民センター」についてですが、表の中で「つながる」にしか「◎」がついていません。しかし、「② 知る」という要素もあるので、「○」をつけても良いのではないかと考えています。

その後のページにある様々な記述の中にも、知ることに関する事例が含まれている

ように思います。例えば、7ページ4行目の「ねぶたの手伝い」という記述では、地域のねぶた運営組織に属していないこどもや、企業ねぶたに関係のないこどもが、そこで初めてねぶたについて知る機会にもなっています。こうした点からも、「② 知る」に「○」をつけても良いのではないかと感じました。

会長 今、指摘してくださった「青森市東部市民センター」に限らず、この表の評価は、皆様から調査結果の発表を伺った際、私の印象で仮につけたものです。そのため、それぞれの立場から、本当にこの評価で良いのかを厳しくチェックしていただけると大変ありがたいです。

東部市民センターに関しては、「② 知る」という要素も十分にあるため、「○」をつけたいと思います。

委員 この表について、誰がどのように決めたのだろうと思っていました。委員の全員がすべての調査先へ行ったわけではないため、互いに比較しづらいのではないかと感じています。

みらいねっとの活動は、設営自体が楽しただけでなく、地域の人々と「つながる」という要素もありました。しかし、だからといって何でも「◎」にしてしまうと、それぞれの特徴が比較できなくなってしまう。このように評価基準が少し分かりにくいので、すべての調査先に足を運んでいない委員が判断するよりは、全体を客観的に見渡せる事務局などの側で基準を決めていただいた方が良いのではないかと思います。

会長 全体を見られたのは事務局かと思います。私も明確な評価基準を持って「◎」や「○」をつけたわけではありません。委員の皆様の発表を聞きながら、「この要素は色濃くあるな」「この要素は確実にあるな」と、本当に主観でつけたものに過ぎません。そのため、委員の皆様に「これで良いか」を確認していただくのが一番良いと考えています。

委員 3つの要素に触れている部分がそれぞれあるという点が確認できれば、表全体の目的としては問題ないと考えます。どこかの要素が完全に欠けているといった状況がまずいのだと思いますので、「ここも○ではないか」という箇所があれば、どんどん追加していつでも良いということだと思います。

会長 そうしていただけるとありがたいです。お気づきの点があれば、今のご発言のように色々と挙げていただけますと助かります。

みらいねっとの防災訓練の部分ですが、評価はどうしますか。

委員 私が実地調査した感覚としては、やはり「つながる」という要素が非常に大きかったと感じています。そのため、「つながる」と「つくる」の両方を「◎」にしてほしいです。

会長 では、みらいねっとについては、「① つながる」も「◎」に変更することにします。
先ほどの「委員が実地調査を行って見えてきたことをまとめた」という記載と同じように、この評価についてももう少し丁寧に説明を加えておいた方が良いと感じました。そのため、その旨をどこかに明示するようにします。「特定の要素が欠けている」という意味ではなく、「この要素が色濃く出ていた」「委員としてそう感じた部分に◎をつけている」といった、誤解を与えないような注釈をつけることにしたいと思います。

委員 誤字と思われる箇所が2点あります。1点目は16ページの29行目で、「地域の環境を創り上げてためには」となっていますが、「上げて」の「て」は、おそらく「る」の誤りではないかと思います。

もう1点は、次の17ページ7行目の最後で、句点が抜けているのではないかと思います。

会長 ご指摘のとおりだと思います。誤字脱字の部分ですので、ここはきちんと修正します。

委員 中間報告は、最終的には文字だけでまとめる予定ですか。色々な活動事例を文字で読んでみると、文章で細かく説明することも大切ですが、実際写真があった方が、取組の内容が一目で伝わりやすいと感じました。最終的なまとめ方がどのようになるかは分かりませんが、今回は文字だけなのかもしれませんが、もし今後まとめる際に、先ほど話に出た『つくる』の『◎』はこのページのここを指している。」といった紐付けをするのであれば、そこに当時の画像なども添えられていれば、他の方が読んだ時にも取組が分かりやすくなると思います。

会長 確かに絵や写真があった方が、頭の中でイメージが浮かびやすく、内容も伝わりやすいと思います。

事務局 皆様から実地調査の報告をいただいた際の資料や、各団体から提供していただいている資料がたくさんあります。そこから、その団体の活動内容が伝わるようなものを抜き出して、今後は巻末資料という形で整えていきたいと考えていました。ただ、現在はまだ中間報告の段階ということもあり、全体を作り込むところまでは進んでいませんので、後ほど作成したいと考えています。

会長 いずれにしても、写真を掲載する場合には、事前に先方の許可をいただくなどの手続きが必要になってくると思います。実際に掲載する際は、そうした手続きをきちんと踏みながら進めていきたいと考えています。

委員 5ページにある表の野辺地町の「ふるさと学習」の項目で、「③ つくる」の評価についてですが、ここは「○」か「◎」にしても良いのではないかと考えています。理由は、お祭りに出るきっかけを作るような取組があったためです。これまでお祭りに

参加したことがなかった子どもたちにも、「出てみたい」という気持ちを起こさせるようなアプローチがなされていたはずです。このように、課題へアプローチしているという点において、「○」か「◎」をつけたいと考えています。

会長 このように評価を追加していくと、表のマークがインフレを起こしてしまうのではないかと感じます。どの実践もすべて豊かな取組であり、いずれの要素も持ち合わせているため、その中でも「とりわけこの要素に注目すべきだ」という部分に焦点を絞ってマークをつけた方が良いのかもしれませんが。自分が関わった地域についても同じように主張していくと、すべてに「○」がついてしまうのではないかと不安になりました。

そのため、「◎」「○」「空欄」にするのか、それとも「○」だけにするのかといったマークの付け方についても、後段の記述内容と突き合わせながら、どちらの方がより伝わりやすいかを改めて検討したいと考えています。この件はいったん保留とし、事務局と私の方で検討します。

それでは、第2章については、いただいた様々な修正意見を反映させる形にします。

続いては第3章に入ります。ここがメインの章になりますので、(1)(2)(3)と項目ごとに区切りながら、皆様からご意見をいただいて議論を進めます。まずは、第3章の(1)について、いかがでしょうか。

委員 15 ページの 28 行目に「子どもと大人が関わる際、大人には、どの世代の子どもたちであっても『温かく受け入れる姿勢』に加え」という記述があります。22 ページの 1～2 行目にも「世代」という言葉が出てきます。22 ページを読んだ際に、15 ページで使われていた「世代」と、ここで使われている「世代」とでは意味合いが少し違うのではないかと感じました。そのため、15 ページの「どの世代の子どもたちであっても」という部分は、「どの年代」「どの年齢」「どの学年」といったニュアンスの言葉に変えた方が分かりやすくなると感じました。

会長 ご指摘のとおりだと思います。22 ページの記述は「世代」のままで全く違和感はありませんが、15 ページについては「年代」などとした方が良いと考えます。ご指摘いただいたとおりに改めます。

私からになりますが、15 ページの 19 行目についてです。「大人の『すごさ』や『憧れ』が芽生える大人の存在（キーパーソン）こそが」という記述がありますが、文章を読んでいくと、「そういう大人の凄さや憧れが芽生える大人の存在との出会いこそが」とした方が自然ではないかと感じました。「大人が土台なのか」、それとも「大人と子どもが出会うことがベースになるのか」という観点から、改めて修正していただければと思います。

もう 1 点、15 ページの 22 行目からの段落について、前の段落とのつながりを考慮すると、「そのためには、大人自身も地域について学習し、その魅力や価値を再認識するための機会を創出していくこと、そして、大人が地域活動を楽しみ、真剣に取り組んでいる姿やその成果が見えるようにしていく機会を、公民館等の社会教育施設が関

わって作ることも大切である。また、地域の大人が、こどもへの理解を深めるための学びの場、こどもの権利を含めた関わり方を学べる場として、公民館等の社会教育施設の役割を充実させていくことも鍵となる。」というように、文章を組み換えることによって論理のつながりをスムーズにしたいという意見です。

委員 15 ページ 19 行目の「大人の『すごさ』や『憧れ』が芽生える大人の存在」という表現について、1 回目の「大人」という言葉は不要ではないかと感じました。

例えば、「こどもたちの中に、単なる『楽しそう』という感情を超え、『すごさ』や『憧れ』が芽生える大人の存在（キーパーソン）との出会いこそが」とすれば、あえて「大人」という言葉を 2 回繰り返さなくても伝わるのではないのでしょうか。

会長 ご指摘のとおり、「大人」という言葉が繰り返されていることが読みづらさにつながっていますので、そのように修正します。

もう 1 点だけ提案があります。16 ページから 17 ページにかけての、「イ こどもが自己決定、意見表明、参画できる環境づくり」の項目についてです。

16 ページの 32 行目から 17 ページ 2 行目までの「学校においても学校運営協議会（コミュニティ・スクール）へのこどもの参画を推進していくことが期待される。」という記述がある部分です。現在、青森県内においては、こどもの参画が一般的に広がっていない状況であるため、この記述には少し唐突感があるという指摘が、前回の社会教育委員の会議でも出されていました。

この点については、例えば、山口県山口市や札幌市など、こどもの参画を意識的に進めている自治体があり、具体的な事例も出てきています。そうした事例も含め、コラムのような形でコミュニティ・スクールへのこどもの参画について少し解説を加えた方が、読み手に誤解なく伝わるのではないかと考え、提案します。

委員 関連して、どれくらい盛り込めるかは分かりませんが、私は昨年度から北斗高校の学校運営協議会に関わっています。そこでは、学校運営協議会の大人メンバーと在校生の高校生とが直接やり取りをし、学校の良さや面白さ、さらにはその上での課題などについて話し合う場を年に 1、2 回ほど設けています。

取組としてまだ十分ではないかもしれませんが、高校生と対話するこうした活動も、こどもの参画に向けた一つの芽生えになっていくのではないかと感じています。可能であれば、このような事例についても触れてもらえるとありがたいです。

会長 三沢高校でもコミュニティ・スクールという形ではないものの、三者協議会のような取組を行っていると思います。そうした事例も盛り込むことができれば、コミュニティ・スクールだけに限定せず、学校運営全般にこどもが関わり、参画していくという流れにつなげることができるのではないかと考えます。これらの事例の反映も含めてぜひ検討してみたいと思います。

委員 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）について、高校の場合はスムーズにこ

どもが参画できる土壌があります。現在、コミュニティ・スクールがスタートしていますが、小中学校の方がかなり早い段階から導入されていて、一部の地域などでは非常に浸透していると感じていました。

しかし、実際には市町村間での取組の差が、非常に大きいのが現状です。実は、今年の8月に開催される町村教育長研修会のテーマが「学校運営協議会」になっています。まだ地域ごとの差があるため、今回の報告などに具体的な事例をたくさん盛り込んでいただければ、非常に参考になります。

市と町村では組織のあり方が異なりますが、教育長の会議で出た話をそれぞれの教育委員会にどれほど持ち帰って共有してもらえるかは分かりません。だからこそ、こうした様々な媒体を通じて事例を示していくことは極めて重要です。そのため、この部分についてはより充実させてほしいと思います。

事務局 コミュニティ・スクールへのこどもの参画については、現在、文部科学省でも推進していて、関心が高まっています。具体的には、大学生を協議会の委員に任命したり、在校生を「熟議」の場に交えて一緒に議論を行ったりする取組です。こどもたちに当事者意識を持ってもらい、彼らの声を直接運営に反映させるという点で、国は重要視しています。まさにこうした国の最新の動きも捉えながら、今回の報告の中に内容を組み込めると、非常に実のあるものになると考えています。

会長 国の動向もしっかりと確認し、本文で触れながら、補足のコラムなどを活用して文章を作成していきたいと思います。

また、町村のコミュニティ・スクールの中で「こどもの声を積極的に聴く」といった興味深い取り組みや動きがありましたら、ぜひご紹介ください。そうした事例も積極的に盛り込んでいきたいと考えていますので、今後また情報があれば共有していただけると嬉しいです。

委員 審議事項とは直接関係ないかもしれませんが、16ページの「こどもが自己決定・意見表明・参画できる環境づくり」に少し関係しているのではないかという、私個人の印象をお話しします。

青森で子育てをしている人たちは、東京と比べて、こどもと親の関係性が非常に近いと強く感じています。東京などでは、小学校でも中学校でも、こどもは「自分の言うことを聞かない一人の個人」という親の印象が強くあります。受験でも「私はここに行ってほしいけれど、本人はここに行きたがっている」というような捉え方です。しかし青森では、だいたいこどもと親の意見が一致しており、「ここを目指そう」と一緒に取り組んでいるイメージがあります。これは、目標が同じ時には非常に良いことですが、意見が離れてしまった時に課題が生じるのではないかと考えています。こどもの頃から親が支えてくれることを半分当たり前に感じていると、いざ親と意見が分かれた時に、自分への自信を持てなくなってしまうのではないかと思います。自分でやってきたという根っこの部分に常に親がいた場合、親に反対された瞬間にグラグラと揺らいでしまうのではないのでしょうか。

しかし、親と意見が離れたとしても、地域には支えてくれる大人がほかにいるということを教えてあげられる場こそが、生涯学習なのではないかと思います。

会長 東京と青森の親子のあり方のどちらが良いかということは別として、こどもも一つの独立した人格を持った存在であることを、私たち大人自身がきちんと理解することは非常に重要なことだと考えます。その上で私たちに求められるのは、こどもがそうした人格を持った存在であると理解することを含め、こども理解やこどもの人権に関する理解を深めていくことではないかと感じました。

そうすると、(1)の「ア 地域に生きる大人の姿勢」に関わってきますが、例えば公民館等の社会教育施設や、PTAの研修会といった様々な場で、大人自身がこどもについて学ぶ機会をどれだけ拡充していけるかという点も、大事な要素になると考えています。そこにつなげる形で、今の発言の意図を反映させていければと思いますが、そのような方向性で違和感はありませんか。

委員 このような視点を持っている人もいるということが伝われば十分です。

委員 今の審議事項は、公民館などいわば「家庭の外」ですので、家庭の外にも大人がいて、社会があり、たとえ家庭内で心がグラつくようなことがあっても、違う世界が存在し、自分を支えてくれる人がいるかもしれない、自分は間違っていないかもしれないと思える場所があるということを、まさにこの項目で打ち出せるのではないかと思います。

(1)についての議論ですが、この内容は(2)の方にかなり反映できる部分があるのではないかと思いますし、文言を少し変えることで、その意味合いをさらに強めることができると考えています。例えば、(2)の「ア 地域学習を始められる環境づくり」や「イ 地域学習の機会(事業)づくり」などは、地域と関わる部分がより出ていると感じました。

会長 親以外の価値観を持っている大人と出会い、支えられていくことは非常に大切です。私は(2)の「ア」や「イ」よりも、(3)の「ア 大人とこどもたちが共に活動し、語り合う場の創出」の項目の方にうまく盛り込んでいけるのではないかと感じました。この内容は、(2)にするか(3)にするかは別として、うまく反映させられるように検討してみたいと思います。

委員 15 ページの 22 行目の段落周辺に追加すると良いと考えている内容があります。この段落は、地域に生きる大人の姿勢として、大人がこどもに関してどんどん学んでいく場面の必要性が述べられている箇所です。

しかし、実際に大人がこどもと出会える場について考えると、学校の外へ出られるような授業や科目の設定などはあるものの、なかなか十分ではないという現状があります。そうした状況において、「学校運営協議会」を一つの糸口や窓口として位置づけ、こどもと出会ったり学校の内部について知っていったりする、という内容がこの段落

に書かれていると、次の（２）の項目へも話をつなげやすくなるのではないかと感じました。そのため、この段落の中で、「学校運営協議会を糸口や窓口としながら、こどもや学校について学んでいく機会があると良い」という趣旨の記述が加わると良いと考えています。

会長 それでは、第３章の（１）については、皆様から出していただいた様々な意見を反映させる形にしたいと思います。

（休憩）

会長 第３章（２）に移ります。

委員 まず、20 ページの１行目から 13 行目についての意見となります。ここには、総合的な学習の時間につながるような内容が書かれています。これから学習指導要領が改訂され、新学習指導要領では小学校の「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」になります。そのため、この部分を強く押し出して探究活動につなげていくという意味で、非常に良い内容だと思いました。

次に、同じく 20 ページの「ウ 地域学習の展開」についてです。ここでは、野辺地町の「ふるさと学習」の事例を取り上げていただいています。ただ、「ふるさと学習」という名前が付いていなくても、どこの学校でも「自分の地域を知る」という学習を、社会科や総合的な学習の時間などで必ず行っているはずです。各学校がそうした取組を洗い出した上で、学校として活動する際には、社会教育施設と必ず関わり、つながっている部分が多いと考えています。そのため、自校で行っている取組が社会教育施設とつながっていることを、38 行目の記述へつなげていけるような文章にできると良いと思います。どこの学校でも取り組んでいることだからこそ、自校の活動をもう一度見直し、洗い出すことで、社会教育施設とはっきりと、そして積極的に進んでつながっていけるような内容にできないかと感じました。

会長 例えば、小学校の総合的な学習の時間などを改めて見直してみて、地域の社会教育施設などとも連動・連携していくことで、もっとダイナミックで面白い展開が生まれてくるということを、文章のどこかに明示する、というイメージでよろしいでしょうか。

委員 各学校で既に取り組んでいることに改めて気づく、という表現は少し変かもしれませんが、野辺地町の「ふるさと学習」の一覧表は決して新しいことではありません。

これまで町で行われてきた様々な取組をまとめることで、しっかりとした系統立てを行い、継続できるようにしたいと考えました。異動などで先生や校長先生が変わった際に、「授業時数を確保するためにこの活動はやめる」と言われないようにするために作ったものです。小学校１年生から６年生、そして中学校に至るまで、こうしたふるさとの学習をきちんと継続させたいと考えました。「今年は別の行事があるからこの

活動は行わない。」「ふるさと検定は実施しない。」ということを防ぎたくて導入しました。

4月に開催される新採用者の顔合わせの会でも一覧表を配布し、「これに沿って進めてください。」と伝えています。どこの地域でもすでに実施している取組をまとめて、継続できる形に整えることは可能であると考えています。

会長 各学校でも地域とつながった学びはすでに展開されているものの、それらがまだ「点」の状態に留まっているため、それらをつないでいく必要があると捉えました。さらに、学校内だけでなく社会教育施設などとも連携を強めることで、町全体が一体となった体系的な地域学習の仕組みが整い、その中で継続的な展開が見とおせるようになる、というふうに理解しました。

20 ページ 23 行目にある「野辺地町の事例のように」という記述の後に、今お話しいただいたような背景や説明を加えながら丁寧に書いていくことで、より意図が伝わりやすくなると考えます。そのため、この箇所にも少し丁寧な説明を書き加えたいと思います。

委員 第2章までは具体的な事例が挙げられていたため分かりやすかったのですが、第3章に入り、どのポイントを意識して指摘や思考を巡らせれば良いのか少し戸惑っています。

この資料で使われている「地域学習」とは、具体的に何を指しているのでしょうか。第2章で議論していた「地域の人々に関わること」や「その土地の文化を学ぶこと」などを指すのでしょうか。ここで定義されている地域学習の概念について、もう一度しっかりと理解したいと考えています。

会長 地域学習をどのように捉えるかという点ですが、先ほどの5ページの表にもあるとおり、まずは「地域の人とつながる」学びが大事な要素です。そして、「地域の歴史や文化など、様々な地域を知る」学びも重要な要素になってきます。さらに、単につながって知るだけでなく、こどもたち自身が地域の課題を解決したり、地域を元気にしたりする「地域をつくる」ための学びも含まれます。これらが地域学習を捉える上での重要な要素になると考えています。これら3つの要素を、こどもたちの年齢や発達段階に応じてうまく組み合わせながら実践を作っていくことが、重要なベース、基調としてあります。

ただ、そうした枠組みだけに縛られるのではなく、第3章にあるように、それらをベースにしつつも、地域学習自体をもう少し幅広く捉えてみたら色々な可能性が広がってくるのではないかと思います。具体的には(2)の冒頭の部分ですが、地域学習とは、「地域のヒト・モノ・コトと自分自身が相互に関わり合いを持ちながら、地域と自分の関係を変えていったり、自分をつくっていったりするプロセスである。」という根本的なところに立ち返ってみれば、もっと色々な取組や営みを地域学習として捉えられるようになるのではないかと考えました。つまり、ベースとして「地域とつながる、知る、つくる」があり、もう一度その根本に立ち返りながら、どのような

ことができるかを考えてみようというイメージです。

(2) の書き出しの部分について、自分なりに違和感を持った点が 1 点あります。資料では「地域のヒト・モノ・コト『が』」となっていますが、ここは「が」ではない方が良く考えています。こども自身が地域の様々なヒトやモノ、コトとお互いに関わり、相互作用を及ぼし合いながら、地域と自分の関係を変えていったり自分をつくっていったりする、そういう営み全体を指すということを言いたかったからです。そのため、「が」ではなく、「こどもたちが地域のヒト・モノ・コトと関わり合いを持ちながら」という表現に書き改めていただく方が良く考えています。

委員 地域学習というのは学校を離れた学習ではありますが、そこには生きるための、あるいはサバイバル的な学習という側面もあるのだろうと考えていました。

(1) の議論の際、地域の誇りとなる大人の存在について触れましたが、私はそれをロールモデル、つまりこどもたちの将来のキャリアの選択肢となるような、憧れの大人が身近にいることだと捉えていました。そのため、ここでの「学習」が将来のビジネスにつながるような大人を目指すものなのか、それとももっと根本的な「生きるためのサバイバル」なのか分からなくなっていました。もっと哲学的な、文化を営むという人間としての活動が含まれているのだと分かりました。

会長 何か引っかかるところや思うところがあれば、会議中に限らず、後から事務局宛てに「ここをこのように修正した方が良い。」といったご意見をいただけると嬉しいです。

委員 私はアメリカに 10 年ほど住んでいた経験があります。向こうのこどもたちは、10 代で起業したり、18 歳になる前に仕事を始めてミリオネアになったりする子たちもいます。青森県に帰ってきてこどもたちを見ていると、ビジネスを行っている子は少なくても、お祭りの時に太鼓のリーダーを務めるなど、コミュニティのリーダーとしてしっかりと成立しているこどもたちや、生きるという意味で自立しているこどもたちが多いと感じます。

シリコンバレーにいる 10 代のミリオネアの中には、生活能力がなく、料理も洗濯もできないという子もいます。青森県のこどもたちは、良い意味で大人からの影響を強く受けています。自分で主体的に選択していなくても、大人にしっかりと守られていることで、生活の基盤ができているという側面もあります。そうした青森県ならではの良さを、もう少し具体的に書き加えても良いのではないかと思います。ここにはまだ書かれていない、ヒト・モノ・コトとつながっているからこそ生じる青森県の具体的な強みがあると感じています。そこを青森県の生涯学習や地域学習の強みとして、ぜひ推したいと考えています。

会長 (2) の書き出しは少し抽象的な内容から始まっていて、どのように理解すれば良いか難しい部分があると思います。その際、青森の様々な地域には豊かなヒト・モノ・コトがあり、そこに関わり合いながら育っていくことの意味や重要性がたくさんあるという点をここで少し書き足せると、抽象的な内容からうまくつながっていくのでは

ないかと考えました。

もしその部分の文案を思いつきましたら、ぜひ事務局へ「このような文章を入れたら良いのではないかな。」とご提案いただけますと非常にありがたいです。一度この件を持ち帰っていただき、改めてご検討いただけますと嬉しいです。

委員 19 ページ 19 行目の「さらに」で始まる段落についてです。ここでは社会教育施設にとどまらず、放課後子ども教室やこども食堂など、こどもの居場所との接点やこどもの居場所をつくっていくことも含めて環境づくりとして考えていく、ということが述べられています。そこで、この箇所に「放課後児童クラブ」なども含められたら良いのではないかと考えました。具体的な事業名を出していくと対象が絞られてしまう面もあるため、すべてを挙げきれないのであれば、大きく抽象的にまとめて書いても良いとは思いますが。ただ、放課後児童クラブや学童保育といったところも入っていくと良いと感じます。また、最近は民間の学童も増えていますので、まとめて「社会教育施設以外の既存のこどもの居場所」といった表現にしても良いかもしれません。

会長 この部分に「放課後児童クラブ」や「学童保育」を加えるか、あるいは「こどもの社会教育施設以外の場所」として幅広く括るか、いずれかの方向で検討したいと思います。

1 点提案させてください。19 ページ 34 行目の「多世代の大人と一緒に地域の伝統文化等に参加する」という記述がありますが、これは日本語として少し不自然ではないかと感じました。「多世代の大人と一緒に地域の伝統行事に参加する」などとするのが良いと考えています。

委員 19 ページ 25 行目に「深い連携を持つ公民館」という記述があります。意味やイメージは通じるのですが、「深く連携する」や「連携できる」など、連携の後に続く言葉を変えた方が、表現として落ち着きが良いのではないかと感じました。

会長 19 ページ 25 行目については、私も少し引っかかっていたところでした。ご提案のように「深く連携できる」といった表現に変えるのも良いですし、あるいは、市町村の社会教育主事と公民館等の職員を並列に扱う形にしても良いのではないかと考えています。両者の連携ももちろん大切ですが、並列に並べた上で「そのようなコーディネート機能が求められる」とする形も一案ですので、そこも含めて改めて検討してみます。

委員 20 ページ 38 行目の文頭が 1 文字分前に出てしまっていますので、その点だけ指摘いたします。

会長 そこは誤植ですので、きちんと直しておきます。

私からもう 1 点発言させてください。20 ページの 31 行目からの段落についてです。ここには「AAR サイクル」という、少し聞き馴染みのない言葉が登場します。この「AAR」

という概念には、チェックやエバリュエーションといった「評価」を意味する言葉が含まれていません。そのため、活動を継続的にブラッシュアップしていく「評価や省察の仕組み」としてこのサイクルを捉えるのではないため、文脈から「評価」という言葉を削除したいと考えています。ここでは、「たのしさ」や「よきこと」を原動力にしながら、まずはやってみて、振り返りを行いながら次へのより良い活動につなげていく、そのようなサイクルを作っていくということを伝えたいと考えています。

もう1点、20ページ38行目から21ページ2行目にかけての文章について、少し文言を修正したいと考えています。具体的には、「そのためには、社会教育関係職員が、各施設や地域の多様な活動をつなぐハブ（仲介役）となり、専門的な知見を最大限に活かしながら、こどもたちの『やってみたい』を掘り起こし、その思いに寄り添いながら丁寧に並走していくことが求められる。」に変更したいと考えています。特に違和感がなければこの表現に改めさせていただきます。

委員 21ページの1行目に「専門的な知見を最大限に活かしながら」という表現があります。これを読んだ際、「社会教育関係職員自身の専門的な知見を活かす」という意味よりは、前段の文脈から考えて、「連携している他の機関の専門的な知見を活かす」という意味にかかっているのではないかと解釈しました。もしそうであるならば、「そのためには、専門的な知見を最大限に活かしながら、社会教育関係職員が、活動をつなぐハブとなり」というように、文章の順序を入れ替えた方が、誤解がないのではないかと捉えましたがいかがでしょうか。

もし、社会教育関係職員側にも専門的な知見があり、それも最大限に活かすという両方の意味を持たせているのであれば、現在の文章のままで成り立っていると思います。

会長 今、指摘してくださったのは、20ページ29行目にあるようなNPOや企業、町会、学校等、地域にある様々な主体が持つそれぞれの専門的な知見と、社会教育施設の職員が当然持っている専門的な知見、これらをうまく組み合わせていきながら進めるというニュアンスにした方が良いのではないかと、ということでしょうか。

委員 もし双方の知見を組み合わせるというニュアンスなのであれば、現在の文章のままで良いと思います。しかし、もし専門的な知見を持っているのが外部の機関だけを指しているという意味なのであれば、文章の記述を単純に入れ替えた方が誤解を招かないと考えています。前段の文章から、この知見がどこにあるものを指しているのか明確に捉えきれなかったため、どちらの意図なのかという確認も含めての意見です。

会長 この場でどのように修正するかを決めるのは難しいため、ご指摘いただいた内容を踏まえ、正確に文意が伝わるように「専門的な知見」の扱いについては改めて検討します。

委員 この報告書は、社会教育職員の方々も読むと思うため、自分たちの専門的な知見に

について職員自身も主体として捉えて動くべきなのか、それとも役割を切り分けてハブになることに専念する方が良いのかという点は重要です。自分がもし職員だった場合、この文章から「自分が具体的に何をすべきか」というアクションにつながる部分だと捉えました。そのため、執筆の意図が明確に伝わるようになっていれば良いと考えています。

会長 当然、公民館主事や学芸員などの施設職員にもそれぞれの専門性があり、それを活かすことは非常に重要だと考えます。また、NPOをはじめとする地域の様々な主体にもそれぞれの専門性があります。そのため、誤解が生じないように、お互いの専門性をつなぎ合わせていくことの大切さがきちんと伝わる表現に修正したいと思います。それでは、(2)についてはここまでとします。最後に、第3章の(3)へ進みます。

委員 22ページの1から3行目にある「地域は、大人と子どもが関わり合いながら、今の世代から次の世代に引き継がれるとともに、次の世代によってつくり変えられながら、世代を超えて受け継がれていくものである。」という記述についてです。2行目の「とともに」で接続されている部分が少し分かりづらいと感じました。案として、「引き継がれている。そして、次の世代によってつくり変えられながら」と文章を区切った方が、理解できるのではないのでしょうか。私の主観も入っているかもしれませんが、皆様の中で気になる点やアイデアがあればお助けいただけるとありがたいです。

もう1点、23ページ3行目からの段落についてです。ここは、無償ボランティアという形態をとることで講師役となる方が限られてしまい、教えられる内容まで制限されてしまうのではないかと、という懸念を述べているのだと思います。だからこそ、地域サークルが持っているノウハウを次の世代に伝えるためにも、そうしたサークルと接点を持つ公民館がしっかりと関わっていきましょう、ということを言いたいのではないのでしょうか。ここは、5から6行目の「普段の活動の延長で協力できる場合や人間的なつながりの中で依頼できる部分も多いが」という一文を削り、「地域サークルが持っているノウハウを次の世代の子どもたちに伝えるためにも、地域サークルとの接点を持つ公民館の関わりが期待される。」とした方がよいのではないかと思います。

会長 1点目にご指摘いただいた(3)の書き出し部分ですが、確かに「～ながら」「～とともに」「～ながら」と表現が連続して文章が長くつながっているため、2つの文に分けた方が分かりやすくなるので修正します。

2点目ですが、過去の審議会や社会教育委員会において「無償のボランティアベースだけでは、なかなか活動が広がっていかない面もあるのではないか。」「必ずしも無償ボランティアに頼るのではなく、しかるべき対価をお支払いして取り組んでいく場面も必要だ。」といった趣旨のご発言が委員の皆様からあり、それを反映させた部分だったかと記憶しています。

ただ、現状の記述ではその意図がうまく伝わっていない印象を受けます。例えば、部活動の地域展開などの動きを受け、子どもたちが公民館などで活動する地域サークルの方々と関わりながら共に活動していくことを前提とした場合、すべてを無償で行

ってしまうと活動の十分な広がりを持てなくなる場合があるため、状況によってはしかるべき対価をお支払いし、一緒に活動できる仕組みや体制を整えていくことも検討すべきである、というニュアンスにする方が、ここに記載された内容や委員の皆様の発言をより適切に反映できるのではないかと考えます。

委員 学習機会を提供する際には、無償ボランティアではなく、有償でしっかり講師を担ってもらおうということです。普段地域サークルで活動されている方々が公民館などにつながっていれば、有償で講師を担ってもらえるのではないかと、といった趣旨です。

会長 例えばコロナ禍などを経て公民館のサークル活動の元気がなくなったり、解散してしまったりする事例が見られる中で、それらを再編・活性化していく際には、公民館などがしっかりと連携し、講師への謝金などをサポートしていくことも重要だ、という趣旨と捉えてよろしいでしょうか。

委員 そのような趣旨でよいです。ただ、それだけに限らず、資料に書かれているような内容も含まれていると思います。その内容のニュアンスがしっかりと伝わるよう、書き直していただければと思います。

会長 22 ページの 28 行目の段落に、コロナ禍による活動休止を経てサークル自体が厳しい状況にあるという趣旨の記述があります。そこに関連したサポートのあり方などにも、今の意見をうまく反映できるかもしれません。

23 ページ 3 行目からの無償ボランティアに関する部分についても、どのように記述するのが良いかももう一度練り直したいと考えています。

委員 言葉のニュアンスの問題なのですが、22 ページに「大人たちの学び」「大人とこどもたち」「地域の大人とのつながり」といった記述があり、以前にも「こどもの定義とは何か」という議論があったかと思います。青森県に帰ってきて強く感じるのは、一言で「大人」と言っても、地域の 70 代・80 代のコミュニティと、20 代から 40 代の世代とでは全く異なるという点です。そのため、資料の中で「大人」と「こども」とはつきりと対比させて書いてしまうと、2 極化しているように見えてしまいます。

希望としては、「大人」という言葉ではなく「社会」など、単なる人の分類にとどまらない表現を選びたいと考えています。「こども」という表記はそのままで良いと思いますが、「社会とこどもたち」とするなど、言葉選びを少し工夫できないでしょうか。

(3) の見出しにある「地域の大人たち」という表現についても、「社会」や「地域の人々」といった言い方に変えたいと感じています。

「社会とつながる」ということを示すために「大人」という言葉を使っているのだと思いますが、大人とこどもの 2 項対立のように見えてしまうのは、少し漠然とした分類だと感じます。社会につながるという意味を込めて、「人々」や「社会」という言葉を使ってみてはどうでしょうか。

会長 今回の発言の趣旨は、非常に良く分かります。ただ一方で、(3)の項目内にあるすべての「大人」という言葉をなくしてしまって良いのかどうか、少し悩ましく感じる部分もあります。

例えば、「ア」の見出しにある「大人と子どもたちが共に活動し」といった箇所などは、「大人」という言葉をどう捉えるかは別として、表現として残しておいた方が収まりが良いと感じます。ただ、場面によっては「人々」や「社会」「地域社会」という言葉に置き換えた方が適切な箇所もあるかと思います。「大人」という表現を使うことで、特に子どもとの2項対立が生じて違和感を覚える具体的な箇所があれば、例としてご指摘いただけるとありがたいです。

委員 「ア」の「大人と子どもたち」という表現については、「大人」という言葉を残しても良いと思います。しかし、「イ」の公民館については、非常に幅広い年代の方々が利用されています。22 ページ 29 行目に「多くの地域のサークル」「メンバーの高齢化」という記述がありますが、単に「大人」と書かれていると、高齢者を指しているのか、あるいは20代から50代の働く世代を指しているのかが曖昧です。そのため、公民館における表記は、「大人」よりも「人々」とする方が適切だと考えます。日本人の大人だけでなく、外国人のALTなども含まれるため、「人々」という表現を用いることで、より多様な文化や存在を想起させられるのではないのでしょうか。

会長 今回の議論として「地域の大人たちの学び・活動の成果を子どもたちの地域学習に生かすための方策」という大きな軸があります。そのため、文章全体から「大人」という言葉を完全に省くことは難しい側面があります。しかし、単に「大人」と書くと地元の住民ばかりをイメージしがちですが、外国籍の住民を含めて多様な大人が地域には存在します。そうした広がりを持って捉えられるよう、修正すべき箇所は適切に改めていきたいと思います。

具体的に修正すべき点などがあれば後からでも構いませんので、ご意見をお寄せいただけると幸いです。

委員 これまで「地域コミュニティの中で子どもたちを育み、地域に愛着を持つ大人になってほしい」という前提で、お互いに理解し合い、支え合うことの大切さを議論してきました。しかし、都会と地方の決定的な違いは「他人でいられる時間が少ない」という点にあると感じています。

私自身、東京で20年ほど通勤・通学をしましたし、自宅前がアパートでしたが、30年間、誰とも知り合いにも顔見知りにもなりません。一方、現在の立場では、どこへ行っても知っている人に声をかけられます。東京へ出張に行くと、誰も私を知らず声をかけてこないため、自由で非常に心が楽になります。

子どもたちにとっても、周囲が全員「自分を知っている」という環境は、無意識のうちにプレッシャーになっているのではないのでしょうか。狭い地域では「誰々さんの家の子ども」「どこそこに住む誰々ちゃん」「兄弟構成」まで知られてしまいます。そのため、青森でそうしたプレッシャーから解放され、ホッと一息つけるような「誰も

自分を知らない空間」を提供することは非常に難しいと感じています。だからこそ、こどもたちはネット世界などに解放感を求めてしまうのではないのでしょうか。

一つの問題意識として、生涯学習の枠組みの中で、「誰も自分を知らない空間でホッと過ごせる場所」を用意できないだろうかと感じました。

委員 「(2) 幼少期からの年代に応じた地域学習の進め方」にもつながる内容だと感じながら伺っていました。佐々木正美さんたちが、「こどもが育つ上で周りにどういう大人がいると良いか」という話をされる中で、責任の軽い大人のような存在があると救われると指摘しています。不登校支援の業界では、斜めの関係とも呼ばれますが、保護者や担任のように、監督責任を含めて絶対的な立場にあるわけではないけれど、関心を持って接してくれる大人がいることでこどもは救われるのです。

もしそうした大人が存在しないと、こどもに関わる大人が「絶対的な責任者」か「一切関わらない人」かの二択に極端化してしまいます。その結果、こどもにとって「息苦しい環境」か「無関心な環境」かの二極化が進み、育つための「余白」が失われてしまうと思います。

このような「曖昧な領域」があるということは、決して削ぎ落としてはならない情報だと感じています。こどもが育つ環境において不可欠な要素であり、こどもと大人が共に暮らす中で関係性を保つためにも不可欠な視点であり、非常に大事な要素だと考えています。

会長 こどもたちの育ちに「余白」を保証していくことは非常に重要です。議論を文章にまとめようとする、どうしてもこどもたちを囲い込むような表現になってしまう傾向があるため、その点については苦慮しています。削ぎ落としてはいけない部分だからこそ、どのような形で文章に盛り込むか、改めてご検討いただけると嬉しいです。

報告案は「こどもたちを大切に育て、地域の次代の担い手に」というメッセージが強すぎるあまり、「地域がこどもを手放さない」というように受け取られかねません。そうではなく、こどもたちには無限の可能性があり、たとえ青森を出て世界へ羽ばたいたとしても、どこにいても地元のことを大切に思ってくれるようなこどもたちがたくさん増えることこそが、将来の青森の持続可能性につながるはずです。

そうした広い視点もきちんと打ち出すことが大切だと改めて気づかされました。今の時点では、どこにどう入れればうまく収まるかという具体的な構成までは固まりませんので、他の委員の皆様も今の観点を持って読み直していただき、文章の中に「余白」をどう反映させていくか、アイデアがあればぜひお寄せください。

委員 先ほどの内容を取り入れるとすれば、17 ページの「ウ こどもが主役となる機会(事業)の充実」の後に、「エ」として「こどもが主役とならない権利」のような項目を設ける形が考えられます。「どちらであっても構わない」「生きていること自体が素晴らしい」というメッセージです。

東京では、極端に言えば自分のこども以外はライバルのような雰囲気がありますが、青森では地域全体でこどもたちを大切にしており、非常に素晴らしい違いだと感じて

います。ただ、こどもによってはそのように周囲から過剰に関わられず、放っておかれる方が気楽な場合もあります。意思を持って「自分是不取り組まない」という選択ができる自由という意味合いも含め、「ウ」の後に追加するのが良いのではないかと感じました。

会長 「ウ」の後に「エ」を追加する案のほか、(1)の書き出しの部分に記述を挿入する案も考えられますので検討します。

委員 16 ページの「イ こどもが自己決定・意見表明・参画できる環境づくり」の「意見表明」の箇所に入れるのも一つの方法だと感じました。

以前の会議で、今までの当たり前を崩すような経験が必要なのではないかという趣旨の意見を述べたことがあります。それも「放っておかれること」や「地域とのつながりとは逆の方向へ向かうこと」を含めての提案でした。一度外の世界へ出ることで、今まで当たり前だと思っていたことがそうではないと実感した時に、新たな変化が生まれると感じています。そうした経験を通じて何を感じ、それを外部へ表明するかどうかについても、本人に委ねられる部分が大きいと考えます。

そのため、16 ページの「イ」にある「自己決定」や「意見表明」の項目へうまく組み込むことで、「意見を聴かれるこどもの権利」の中に、そうした選択肢も広く含まれてくるのではないかと感じました。個人的には、この項目も適しているのではないかと思います。

会長 (1)の「エ」として新しい項目を追加する案や、(1)の「イ」の項目内に記述を書き加える案など、様々なアイデアが出されましたので、今すぐ結論は出さず、ひとまず案として受け止めさせていただきます。

委員 23 ページの「ウ 学校運営協議会や町内会などの仕組みの活用」という見出しと、その下にある「特別活動」や「総合的な学習の時間」、「総合的な探究の時間」についての記述との間に、あまりつながりを感じられなかったので、見出しを変更した方が良いのではないかと感じています。

見出しのとおり「学校運営協議会」や「町内会」などの仕組みについて触れたいのであれば、本文の中身にももう少しその内容を書き込む必要があります。現在の本文を生かすのであれば、見出しを「学校と社会教育施設がつながる仕組みの創出」や「学校教育と社会教育との連携強化」、「社会教育施設を活用した学校教育との連携」といった表記にする方と整合性が取れるのではないのでしょうか。

本文と見出しのどちらを生かすかは伝えたい内容によりますが、本文の内容を生かすなら見出しを変更すべきですし、見出しの内容を伝えたいのであれば本文に該当する記述を追加すべきだと考えています。

会長 「ウ 学校運営協議会や町内会などの仕組みの活用」については修正を加えていかなければならないと改めて感じました。ご指摘のとおり、見出しに「町内会」とあり

ながら本文に全く触れられていない点は違和感が残るため、再検討が必要です。

原案の意図としては、「学校運営協議会」そのものというよりは、「地域学校協働活動」のような仕組みをより活用していくべきだというニュアンスを含んでいるのではないかと私自身は受け止めています。

地域学校協働活動を展開する際、学校の教育課程としっかりと連動させることが魅力的な取組を生み出す上で重要です。その際、「特別活動」や「総合的な学習の時間」、「総合的な探究の時間」などがうまく機能すると考えています。そのため、見出しを「学校運営協議会」とするよりも「地域学校協働活動」とする方が、本文の内容とのつながりが良くなるのではないかと感じました。そうした点も含め、「ウ」の項目についてはもう一度練り直す作業が必要だと考えています。

委員 最初に報告案を読んだ際、事務局の皆様が大変素晴らしいものを作成してくださったので、このままで十分良いのではないかと感じていました。

まず、細かい点で恐縮ですが、10 ページ 1 行目の「保護者や祖父母から感謝の連絡が寄せられ」という表現について、「感謝の言葉が寄せられ」とした方が、少し柔らかい印象になって良いのではないかと感じました。

次に、23 ページ 17 行目の「公民館職員自身の意識改革やスキルアップを図る必要も出てくる。」という記述です。実地調査でお会いした各市町村の公民館職員の皆様は、一生懸命に社会教育や地域活動に取り組んでいました。そうした現場を知っているだけに、この表現は少し酷なのではないかと思いました。そのため、先ほど提案があったように文章を修正した上で、最後の段落を削除すれば、公民館職員の方々のがんばりや役割がより活きてくるのではないかと思いました。

最後に、先ほど「青森では親とこどもの意見が一致しやすい」というお話がありました。これについては、単に「将来の選択肢が少ないから」という側面もあるのではないかと感じています。都会であれば多種多様な職業や資格の活かし方がありますが、青森では、少し古風な例えかもしれませんが、教員や銀行員、県庁職員といった安定した職業に就いてほしいと願う保護者が多い印象があります。また、農家の保護者の方から「こどもには農家を継がせたくない」といった声を聞くこともあります。

青森県家庭教育アドバイザーとしての立場から、「失敗してもいい」「新しいことに挑戦してみよう」と思える選択肢や範囲が広がっていくことが、青森県にとって望ましい姿なのではないかと常々考えています。

弘前では、最近夕方 6 時になると宵宮の花火が賑やかに上がりますが、そうしたお祭りでも人出が少なくなっていると耳にします。また先日、新聞で「百万遍（数珠回し）」の記事を見かけました。昔、祖母に連れられて大きな数珠をみんなで回した記憶がありますが、そうした地域の伝統や守るべき文化が失われつつあります。こうした地域伝統の継承に関しても、公民館職員だけに負担を強いるのではなく、私たち地域全体で引き継いでいかなければならない課題だと捉えています。公民館職員の方々に任せきりにするのではなく、自分たち自身も主体となって考えていくべきだと感じています。

会長 社会教育関係職員だけに負担を押し付けるのではなく、私たちが地域をつなぎ、自ら動いていかなければならないと改めて感じました。

委員 23 ページ 16 行目からの段落について、先ほど「なくても良いのではないか」というご意見がありましたが、私自身は「公民館職員自身の意識改革やスキルアップ」は必要だと考えています。

19 ページ 13 行目の記述に戻りますが、「公民館等の職員が、各施設のロビー等で何気ない日々の関わりを通じて、こどもたちとの信頼関係を築き、その興味関心や潜在的なニーズを丁寧に汲み取りながら」という部分を読んだ際、最初は「これが本当に現実的なのだろうか」と感じていました。しかし、実地調査をした新潟県糸魚川市・能生地区の公民館では、実際にそれが実践されていました。このような公民館が青森県内にもたくさん増えていけば、青森県は大きく変わっていくだろうと感じました。能生地区の館長さんの熱い情熱や、こどもの思いを丁寧に汲み取る技術の背景には、その館長さん自身が社会教育主事の経験をお持ちだったという点もあるかと思います。だからこそ、そうした関わりが可能だったのだと納得しました。

そのため、こうした取組や姿勢はやはり必要だと考えています。ただ、現在の職員の方々が日々の業務で精一杯なのも事実であり、これを現実的なものにするためには、職員の増員や予算の確保といった環境整備が必要になります。「意識改革やスキルアップを図る」こと自体は必要であるものの、現在の表現のままでは現場に対して少し厳しい印象を与えてしまうと感じます。そのため、趣旨は維持しつつも、もう少し表現を柔らかく改めてはどうかと考えています。

会長 公民館の機能強化に関する議論については、諮問事項の3つ目である「仕組みづくり」の中で、青森県内の公民館をどのように再始動・活性化させていくかなどを、しっかりと論じるべき部分でもあると考えています。そうした視点も含めて検討を進めていきます。いずれにしても、最後の記述についてはリライトが必要だと認識していますので、本日いただいたご意見を踏まえた上で、改めて修正案をご提示します。

それでは、(3)の部分についての議論はここまでとします。本日いただいた貴重なご意見を反映させながら、最後の第7回審議会へつなげていきたいと思っています。

本日の議論は以上とし、最後に今後のスケジュールについて事務局よりお願いいたします。

(事務局から「今後のスケジュール」について説明)

会長 スケジュールに関して、皆様から確認事項やご質問等はございませんか。それでは、今ご説明いただいたとおりのスケジュールで、今後進めていきたいと思っています。中間まとめの提出まであと一歩というところですので、引き続きご協力のほど、何卒よろしくお願いいたします。

予定していた案件は、以上となります。すべての議事が終了いたしましたので、進行を事務局にお戻しいたします。

3 閉会

(内容省略)